

2020年度 独創的研究助成費 実績報告書

2021年3月31日

報告者	学科名	看護学科	職名	教授	氏名	関根紳太郎
研究課題	公衆衛生に配慮したBYODとユビキタス英語教育の推進					
研究組織	氏名	所属・職		専門分野	役割分担	
	代表	関根紳太郎	看護学科・教授		メディア英語学	実施責任者（英語教育）
	分担者	池田理恵	看護学科・准教授		看護学	推進支援者（公衆衛生）
研究実績の概要	<p>本研究の目的は、新型コロナウイルス問題にも対応できる公衆衛生に配慮したユビキタス環境での英語教育の実現を目指したものである。実際、一部の学科においては、英語クラスの履修登録者数が、現行コンピュータ演習室の定員45名を超えることがしばしばあり、また英語の特性上、発話の回数も多く、飛沫・接触感染の温床になりかねない。</p> <p>そこで、本研究では、（感染予防に資する）学習者所有の情報端末を積極的に利用した学習環境の構築であるBYOD（Bring Your Own Device）の仕組みづくりを検討した。しかしながら、緊急事態宣言による大学への入構制限により、対面授業から新型コロナウイルス収束後のBYOD教育に応用可能なリアルタイム型オンライン授業に切り替えた。また、前回の研究実績報告書の通り約24%の学生は大型画面のタブレット端末の貸与を希望していたため、学内でオンライン授業を受講する学生向けに、端末の貸与体制を整えた。さらに、貸与された端末を介した接触感染等についても看護学科教員の専門的知見を活用した感染防止策（マスク配布、手指消毒の徹底、使用テーブル等の都度清掃等）を講じた。</p> <p>【研究内容】</p> <p>本研究では、感染拡大防止策の一環として、リアルタイム型の授業を学部ELP科目（看護学科、デザイン工学科）と大学院「国際コミュニケーション特論」（保健福祉学研究科）において実践した。</p> <p><学習環境面></p> <ul style="list-style-type: none"> ・各自所有のデバイスを使用（希望者にはタブレット端末を貸与） ・学内アクセスポイントもしくは自宅のインターネットを使用 ・試験人数の定員となる教室を受講用教室として別途確保 ・基本的に教材等はオンラインで配布する。また、適宜担当教員の講義もオンデマンド型配信で提供した。 ・確認テスト等もオンライン経由で配布し、回収にはGoogle formを活用した。 ・オンライン通信の手段は、本学がマイクロソフト社と包括契約を締結しており、在学中であれば無償で利用可能なOffice365を使用し、その中のMicrosoft TeamsやSharePointを中心に授業を展開した。 <p>※オンライン教材を用意し、ペーパーレス化することも公衆衛生の一環と捉えられる。</p>					

※ 次ページに続く

<公衆衛生面>

- ・大学院科目の対面式指導では、指導開始前にアルコール除菌（液体もしくはシート）を配布し、使用する机、椅子、端末や周辺機器類を清拭した。
- ・マスク、フェイスシールド着用を指示した。
- ・貸与したタブレット端末や教室内で使用したデバイス類は使用后すべて除菌、清拭した。

【学生評価とまとめ】

ELP 科目の最終回で実施したオンラインアンケート結果の一部は次の通りである。

- ・リアルタイムだとライブ感があり、楽しい。
- ・接続し続けるのではなく、セッションを切っているため、疲れずにリラックスして取り組むことができた。
- ・1人で学習に取り組む時間と解説の時間が組み合わされている今のスタイルがとても取り組みやすいです。
- ・ELP2 の授業だけではないのですが課題がきちんと提出できているかが不安です。

このように、通常授業に近似なリアルタイム型の特性が評価されているのがわかる。また、画面を見続けるのではなく、自己学習の時間を複数回設けた（セッション）ことで、体力的な疲労度の軽減につながったようだ。その一方で、Google formを使用した課題提出は、学生側からの確認が自由にできないという点が指摘された。

このように、コロナ禍の英語教育において、従来の対面授業に近似的な学修体験の機会を提供できたことは評価できる。また、オンライン授業により、対面接触が回避できたことで、感染防止策も講じられたと言える。次年度は、対面授業にむけた公衆衛生面の問題と解決にむけて検討をすすめていきたい。

【研究発表】

関根紳太郎、岡真智子、原瀬愛理「コーパスを活用した看護保健領域ディスコースに関する分析と考察」第31回日本医学看護学教育学会学術学会、令和3年3月20日～30日（ウェブ公開）

成果資料目録